

候べきといひたるに、諸人おとがひをはなちてわらひたるに、一人の侍ありて、かはつるみはいくつばかりにてさぶらひしを問たるに、この僧くびをひねりて、きと夜部もしてさぶらひきといふに、大かたどよみあへり、そのまぎれにはやうにげにけりとぞ、

〔北邊隨筆四〕かはつるみ・

宇治拾遺に、かはつるみといふ事あり、これは男色の事なるべし、かはとはカハヤ厠といふ名をおもふに、尿ウリまる事をいふめれば、それよりうつして、尻の事に形容せるなるべし、つるむとは、今は禽獸などの交はるをいふに同じ、この本文、法師の話なれば、男色の名らしくおほゆるなり、これを手銃のこと、いふ人もあれど、さにはあらず、ある所にひめらる、男色の繪卷物にも、悉く法師の男色をかけるをや、男色の事、から國にもふるくありしなり、後漢書佞幸傳云、董賢、字聖卿、哀帝立拜黃門郎、寵愛日甚、常與上同臥起、嘗晝寢、偏藉上輿、上欲起、賢未覺、不覺欲動、賢乃斷輿而起、其恩愛至此云々とも、また、史記韓非傳にも、衛の彌子瑕を靈帝愛せられしに、其寵にはこり、君の車に乗り、くらひ餘し、桃を帝に獻れり、のち寵おとろへて、此二事を罪として、誅せられし事あり、わが御國にても、ふるくありける事にや、略中拾遺集に、山ぶしも野ぶしもかくてこ、ろみつ今はとねりが聞ぞゆかしき、又同集に、あまた見しとよのあかりのもろ人の君しも物を思はするかな、などある、みな男色なるべし、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕

下學集増補、窄乾口號に、呼無心若衆云一ともあり、おもふに、本邦にては、其始法師のもてあそびより事起りしならん、中ごろまでも、俗間には稀なり、略中僧家は勿論、俗間には、

永祿の頃より、元祿の頃まで、わきて甚しきやうにて、彼桃を分ち、袖を斷けむは物かは家を亡ぼし、身を失ふ類、種々の草子どもに多くみえたり、古くは田樂、後は猿樂の役者どもに、男色もて行はれたる者多し、今の芝居役者もおなじ趣なり、今俗お釜と云、いつより此ことなりしにや、本朝